

植林でバトン



④先輩たちが植林した場所で、山の育て方を学ぶ高等科の生徒たち
⑤自分たちで整備した林道を通り、間伐した木を運ぶ(いずれも埼玉県飯能市で)



「トントントン、トントントン」。小気味よい木づちの音が、木工室に響き渡る。
東久留米市の私立学校「自由学園」男子部では、中学・高校の6年間、教室で使用する机と椅子を新入生(中一)が授業で製作する。木工の基礎を学ぶためにと1940年、生徒が寮の机と椅子を作ったのが始まりだ。戦争で実施できない年もあったが、現在まで活動は続き、教室で使用する机と椅子作りは90年代から行われている。
新入生でも作業しやすいようにと、木工部の先輩たちがスギ、ヒノキ、ミズナラの木材を加工して準備。生徒たちは協力して組み立て、ヤスリで表面をなめらかにして、塗料を塗る。全工程を8日間かけて行う。

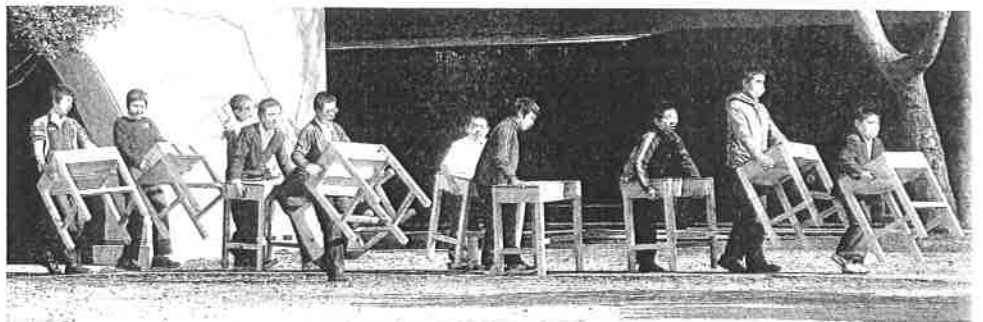
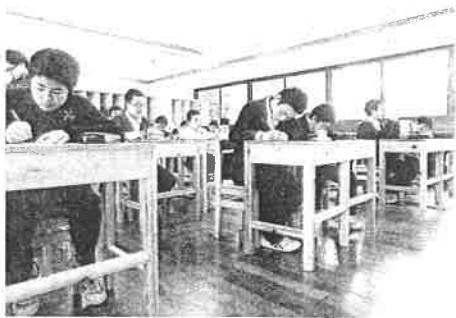
授業を担当する山縣基教諭(41)は「机と椅子を作ることで、木工のほとんどの技術を学ぶことができる。授業をきっかけに、木の文化、林業、自然環境にも興味を持ってもらいたいですね」と話した。
同学園では植林にも力を入れている。生徒たちは埼玉県飯能市にある植林地で、林業や山作りなどを勉強しながら、間伐や山の整備などにも取り組んでいる。将来的には、先輩たちが植え、育てた木を使い、新入生の机と椅子作りをする計画だ。
4月から建築学科のある大学に進学した卒業生の山下耕生さん(18)は「自由学園での木工や植林の経験がきっかけで、将来はものづくりの仕事に就きたいと思うようになりました」。世代を超えて「木の学び」が受け継がれ、新しい人材の芽もすくすくと育っている。

(写真と文・稲垣政則)



伝統の机作り

ホット
20 東京 16
ぴれいあ



①真新しい机を教室まで運ぶ②完成したばかりの机と椅子で初めて文章を書く